新旧セミナー委員いっしょの夕食会。19年度のセミナー委員たちは、他専攻の委員たちがどんな研究や生活をしているのか、興味津々で尋ねている。

平成19年度前期学生セミナー実行委員会がスタート

全分野交流がはぐくむ総研大のアイデンティティー

総研大は各地に分散する共同利用機関をベースとしているため、独自のアイデンティティーが育ちにくい。学生たちは、自主企画の学生セミナーを準備する全分野交流の中で、アイデンティティーをつくりだしている。

新入生の半数近くが学生セミナー実行委員に

「研究人生シミュレーション」：賛成2。

「航路」：賛成3。

「まわり道」：賛成2。

「2007年研究者への旅」：賛成10。

「では、採決の結果、平成19年度前期の学生セミナーのテーマは、今日のところは“2007年研究者への旅”とすることにします」

平成19年度前期学生セミナー実行委員長になったばかりの佐久間俊明さん（日本歴史研究専攻）が、30人を越える学生セミナー実行委員（以下、セミナー委員）にデクレアした。

総研大学生セミナーは、前期（4月）と後期（10月、留学生を対象とする）の入学式に続いて開催されるもので、前年度に入学した学生が自主企画し、約9ヵ月かけて準備をする。今年4月の平成18年度前期学生セミナーのテーマは「対話」で、講演会（約1時間の講演を3本）、交流型イベント（新入生を中心とした参加者が、グループごとにある問題に対して議論を行い、意見をまとめて発表するもの）、体験型イベント（「サイエンスコミュニケーション」というテーマのレクチャーと、それを受けて「短い時間で正確に伝えるスキル」を身につけるため、参加者が1分間スピーチを行うもの）が開かれた。

その3ヵ月後の7月5日、18年度前期のセミナー委員と19年度前期のセミナー委員が葉山キャンパスに集合。18年度前期学生セミナーの反省会と、新旧セミナー委員の引継ぎ、そして第1回平成19年度前期学生セミナー実行委員会が開かれた。学生セミナー実行委員会は、本来、各専攻から1名、計22名で構成される。ところが、1名に絞りきれず専攻の新入生全員がセミナー委員になったり、誘い合ってセミナー委員になったりと、結局、新入生の半数近くがセミナー委員になった。また、5年一貫制博士課程の導入によって、セミナー委員たちの年齢層が若くなったのが19年度の特徴だ。

どんな学生セミナーにしよう?

総研大の学生は全国の大学共同利用機関に散らばっている。そのため、学生セミナー実行委員会の全体会合は4回ほどに限られる。初回だからといって、顔合わせですませるわけにはいかない。セミナーのイメージづくりや方向性は決めておきたい。

「新入生に伝えたいことって何だろう」

「研究者になるってどういうことかだと思うよ」

「研究人生には楽あり苦あり。それを“やんわり”越えてほしいね」

「講師には、まずは研究の出発点を語ってもらおう」

「最先端の研究も必要だけど、挫折したときや失敗したとき、どうやって乗り越えたのか、研究の励みになるような話が聞きたいな」

「研究生活における発心・挫折・希望というストーリー性をセミナー全体にもたせて、ポスターセッションにも反映させるようにしては」

「4月の交流型イベトンでは、異分野の人との話が面白くて、もっと話したかった。その時間を十分にとりたいね」

「英語の講演があってもいいのでは」

「文部科学省の人に、科学政策について話してもらうのはどうか」

さまざまな意見が出たところで、テーマの議論に移る。こうして最後に残った10余りの候補案の中から「2007年研究者への旅」が選ばれたのだ。

具体的なプログラム構成や講師の候補者選びは、次回2ヵ月後の会合で決めることになり、それまでは「“やんわり”掲示板」サイトで意見交換を続けていく。

前年度セミナー委員たちの感想

19年度のセミナー委員たちには、これから山のような準備作業が待っている。これに時間を割かれるのは、最先端の研究環境で本格的な研究生活を始めたばかりの学生たちにとっては厳しい面もあるだろう。18年度前期学生セミナー委員の引継ぎ書に、そのことを書いている人も多い。それでも、セミナー委員をやってよかったというのが、ほぼ全員の感想だ。一つの目標に向かって皆で意見を出し合い、各人が分担した役割を務める。チームワークも生まれていく。学生セミナーが終わったあとには、責任を果たしたという満足感が得られた。

自分と異なる分野の人と知り合い、研究内容や考え方の違いを認識することは自分自身の研究を進める上でも大きなメリットだ。総研大生が他専攻の学生と出会う機会は、入学式と卒業式のときぐらいというほど少ない。セミナー委員たちの会合は格好の交流の場となる。なかでも理系と文系との間の交流は貴重な体験となって残る。このような機会を多くするため、学生セミナーの回数を増やしてはどうかという提案もあった。

18年度のセミナー副委員長であった石谷閑さん（基礎生物学専攻）は、学生セミナーの意義を、

「他専攻との交流を通して、総研大生だという自覚が強まったこと」

と語ってくれた。

19年度のセミナー委員たちも、前年度セミナー委員と同じ思いを抱くようになるのだろうが、人数が増えた分、総研大生としての意識も広がっていくに違いない。

（取材・構成：福島佐紀子）

第1回平成19年度前期学生セミナー実行委員会でのフリーディスカッション。全体での議論のあと、2グループに分かれ、さらにメンバーを変えて2グループを編成、午前中をかけてテーマ設定まで漕ぎつけた。